

# 地域社会とライフデザイン

ライフデザイン研究所 常務取締役  
村場 悦郎

50歳代の半ばに差し掛かり、定年後や老後のライフデザインを真剣に考えるようになった。その中で私の関心の一つは「地域社会との関わり」ということである。新明解国語辞典(三省堂)によると、地域とは「地形や行政管轄などの観点から、なんらかの意味でひとまとまりのものとして他と区別される土地」で、地域社会とは「一定の地域に成立し、利害を共通にする生活共同体。都市・町村など」となっている。したがって見方によっては面積的に広くも狭くも捉えることができそうであるが、筆者の当面の問題意識にある地域は、普通に歩いて行動できるくらいの広さの地域であって、せいぜい徒歩10分くらいの自治会単位、または徒歩3分程度の町内会単位である。

筆者の住まいは都心から80キロ離れた中都市(人口20万人)の駅からさらに15分ほどの農村地帯の一角の小さい造成地である。付近一帯は果樹農家等も残っているが、田畑が勤め人の住宅地にどんどん変わってきている。周辺には市

役所や市立病院など公的機関が移転してきて行政の中心になっている。造成地の他の4軒は同じ市内からの転入者で我が家だけが県外からの転入である。20年前ほぼ同時期に建築し居住開始したが、ホワイトカラーは筆者だけだった。

挨拶程度の付き合いをしている向こう三軒両隣を含めたこのような地域が、実は苦手である。正確に言えば住んでいる地域との関わりがきわめて薄い日常生活を送っている。近所のスーパーに行っても散歩コースにおいても挨拶を交わすような人にめったに会わない。煩わしくないといえそうだが、物足りないといえこのうえなし。20年も住んでいる地域に入りかねているのが現状である。同類のサラリーマン諸氏も多いのではないだろうか。

なぜこのようなことになったかという、転入当初にうまく地域に着地しなかったことに尽きる。最初の5年間は朝早く暗いうちに出勤し夜中に帰る生活で、当時はまだ土曜休日ではなく日曜日は家

にこもって休むか子供を連れて出かけるか、ということで過ごし、地域と交流するゆとりがなかった。地域との関わりで必要なことは妻で事足りた。妻はPTAの役員もやって当時の仲間と10年以上経った今も年2、3回旅行や懇親会を楽しんでいるし、また子供が手を放れて以来の地元のボランティア団体の仲間も市内地域に多い。さらに、趣味のサークルでも市内の遠方に知己を得て充実した地域社会との関わりを持っているようだ。このような状況はサラリーマン夫婦の典型的な地域との関わり方ではなからうか。

この間、自ら自治会や町内会へ参加する必要性もなく意欲もわかなかつたし、一方地域から参加を求められることもなく、地域活動は何代にもわたって住んでいるであろう地元民によって行われていた。このような地域のありようは、同質の新たな居住者で占められる大規模団地とは異なる特殊性であろうが、都市部周辺にはありがちなひとつの類型であろう。開かれた地域、閉じられた地域と分ければ、後者の典型である。

さて、当研究所では1年おきに定点観測の結果を「ライフデザイン白書」としてまとめて発表しているが、第4回目の「2002 - 03年版」を12月に発行した。これによると、バブル崩壊、グローバル化、IT化、少子高齢化などといったさまざまな要素から、日本社会の旧来のシステム

が大きな変化にさらされていることが明らかになっている。白書の概要は今後、本レポートでも紹介する予定であるが、コミュニティに関しても変化を捉え次のように分析している。すなわち、大きく包括的な地域コミュニティ(自治会、町内会など)への再生・回帰ではなく、テーマ性が明確な小さなテーマコミュニティ(趣味や娯楽、勉強・学習に関するグループ、ボランティアグループなど)がオープンにつながっていく方向性を示唆している。

筆者のようにまさに地域参加に遅れてしまった者にとっては、このように考えることは極めて納得できることである。なぜなら伝統的な地域コミュニティへの参加は白書でいうように「わかりづらく、億劫なもの」であり、テーマコミュニティへは自分のリズムで参加でき、かつ自己実現的であるから、と考えられる。筆者の場合数年前から趣味を通じて市内各地の10人以上と交流できるようになったので、冒頭の歩ける範囲の地域における居心地の悪さを少し払拭しつつあるところである。

個人が住む「地域」を広く捉えるにしる、狭く捉えるにしる、テーマコミュニティのような考え方で地域社会に関わりを作っていくことは、高齢化社会のライフデザインの重要な要素のひとつではないだろうか。